米原歴史街道

米原市の歴史・文化財を歩く(139)

京極高次と関ヶ原(大津籠城戦)

―ふるさとの大名奮戦記②―

高知狼煙を上げる

慶長五年(一六〇〇)九月一五日、東西約一七万の大軍が対峙した関ヶ原の戦いは、たった半日で東軍の勝利に終わりました。東軍の主力として奮戦した京極高知は、そのまま街道を疾駆し、長浜から合図の狼煙を上げさせ、遠く琵琶湖を隔てた大津城で孤軍奮闘する兄高次の安否をうかがいますが、返信はなく、落城疑いなしと肩を落としました。

関ヶ原の戦いは、関ヶ原だけではなく、全国各地で多くの前哨戦や同時戦、後日戦がおこなわれました。丹後の田辺城籠城戦や真田昌幸が上田城で徳川本隊を足止めにした戦いが有名ですが、京極高次の「大津籠城戦」は、東軍にとって最も重要な局地戦となりました。

高次は、妹・竜子が秀吉の側室になったことから豊臣家の親類大名として歩みます。天正一五年(一五八七)、九州島津攻略の軍功で大溝城一万石(高島市)を拝領、一八年には小田原攻めの功により八幡山城二万八千石(近江八幡市)、文禄四年(一五九五)大津城六万石の城主となります。ここで重要なことは、高次が琵琶湖水運を掌握する重要な城主を歴任したことです。大溝城は古代から北陸・山陰の物資が集った港・勝野津にあり、八幡山城は二代目関白豊臣秀次が築いた近江の拠点。そして、大津城は、京・上方への人や物資を集積した最も重要な港でした。さらに、文禄四年(一五九五)には佐和山城一〇万石(彦根市)への転封計画があったことが知られています。佐和山城も内湖と湖に面し、東山道(中山道)を抑える交通の要衝です。また、名門京極家を近江に置くことで、近江の武士団も豊臣家に従います。

大津籠城戦

妻・初の姉は豊臣秀頼の母・淀君、妹は徳川秀忠の妻・江である高次の立場は微妙です。慶長五年(一五〇〇)六月一八日、上杉攻めで東上する家康が大津城へ立ち寄り、密約を交わします。しかし、西軍石田方のど真ん中に位置する大津城を死守するのは難しく、高次は八月一〇日兵二千人を率い、加賀前田氏(東軍)を攻めるため西軍方として出陣します。

行軍は遅々として進まず、九月一日ようやく東野(余呉町)に到着したところで、突如塩津浦から琵琶湖を渡り、翌日大津に帰着して、兵糧米などの貯蔵、粟津と逢坂に防御柵を設けるなど籠城戦の準備に入ります。敵の利用を避けるために城下町と三之丸侍屋敷を自ら焼き、京町口などを掘り切り、諸将を配置します。さらに大津の船仲間は、大津への軍勢の帰還を助け、籠城戦にも加わります。高次には武略もあり人望もあったようです。

西軍の大将は毛利元康。「鎮西一の武士」とよばれた立花宗茂や筑紫広門など総勢約一万五千人(軍記物では四万人とも)、湖上からは増田水軍が包囲。対する大津城はわずか三千人です。一二日外堀が埋められ、立花軍は長等山から大筒で攻撃。翌日には三の丸・二の丸に攻め込まれ大津城は裸同然になります。一四日、さすがの高次も淀君の使者を迎えて開城を決意します。翌日、高次は大津城退去のときに、長浜城からの狼煙を確認しています。「東軍の勝利を知り安堵すれども、開城を決めた以上是非もなし」。高次は三井寺で剃髪し、高野山へ退去します。まさにこの日、関ヶ原では東軍が勝利しました。

家康は、二〇日に本丸だけが残った大津城に入り、西軍一万五千人と京・大阪の軍勢を関ヶ原に向かわせなかった高次の功績を高く評価し、若狭国一国八万五千石を与えます。こうして、高次・高知兄弟は、若狭・丹後の国持大名として並び立ち、京極家の復興を果たします。

(歴史文化財保護課)

▲大津城推定復元図(提供：成安造形大学)